

南島文化の視点から

奄美大和村八月歌儀礼的曲目

田畑 千秋

一、はじめに

大和村は奄美大島の中央部に位置し、ほぼ西北の方向に東シナ海がひらけている。山の多い村で、集落は海岸沿いの谷間に存在する。陸の孤島といわれるほど交通事情は悪く、名瀬市と隣接しながら、南西の端の今里集落への県道が整備され、バスが開通したのは昭和40年代もなかばのことである。それまでの名瀬から今里集落、名音集落などへの道は海からであり、今久丸、名音丸が名瀬の港に入っていた記憶は筆者にとっても鮮明である。これといった産業とてないが、かつては集落によってはかつお漁（今里、名音など）、しいたけ業がさかんにおこなわれたところもある。現在は果樹栽培をしてスモモやタンカン、ポンカンなどの柑橘類を作っている。稲作はもうほとんどみられなくなった。大島紬を織る音も和装業界の低迷とともに、あまり聞こえなくなってきた。役場は村の中央部の大きな集落、大和浜にある。大和浜といえば有名なボレグラ（高倉群）のある集落だが、前述のように稲作の衰退とともにし使用されなくなり、今では観光と保存のために村によって管理されている。男女掛け合いの歌遊びもかつては盛んであったが、北大島のカサンウタ（笠利歌）、南大島のヒギヤウタ（東歌）のような勢力はなく、現在ではその間にはさまれて埋没ぎみである。それでもカサンウタでもヒギヤウタでもない独特の節まわしを若干残しているし、歌詞も大和村特有のものを少しく有している。八月踊りも盛んで毎夏名瀬市で行われる新しい行政主導の「奄美祭り」でも、名瀬在住今里会などが頑張っている。しかし、生業の変化（多くの住民が奄美振興事業による道路、港湾整備という土木建築関係の作業員として働いている）や集落住民の高齢化と過疎化のため、各集落の祭り自体がさびしくなってきた。

二、恩勝集落の儀礼的曲目

ミッシャグン

○オシャゲイカラ マシャゲイ

オユルシヌ アルイバ

オニワ マノナカニ

ヨワテイ オショロ

●トウヌチ ショシラレヤ

シマヌ ムトゥ ナルイバ

モモソ ヒキユスイテイ

アスイバシ ギョラサ

○トウヌチ ショシラレヤ

カホナ マアールイ ヤスイガ

ヨネグラヤ メー ナチ

トウクウヤ コシャテイ

●トウヌチ ショシラレヤ

みっしゃ踏み

おしゃげから ましゃげ

お許しがあれば

お庭真中に

祝ってあげましょう

殿地の御主人は

シマのもとなので

百人引き連れて

遊ばせ方の美しさ

殿地の御主人は

果報なうまれですので

米倉は前にして

床は後ろに

殿地の御主人は

クウトウシマデ チュクラ
ヤニエガ トウシ ナルイバ
タアクラ ミクラ
○トウヌチ アミシャレヤ
モノメヌ フカサ
カズイ タラヌ ワキャニ
オサケ タボチ
●クウン トウヌチ ウチバ
ウチメシャニ ミルイバ
オキヤクサマトウムイバ
フクヌ オカミ
○クウン トウヌチ ニワニ
マルキバ ウエーテイ
ニシ ヒギヤヌ タカラ
マルギ ユスイル
●ニシカラム ユリユリ
ヒギヤカラム ユリユリ
ニシ ヒギヤヌ ニヤダマ
ユテイ コ セチ コ
○クウン トウヌチ ウチヤ
カニ カバシャ ヤスイガ
コガネナブイ スイケイテイ
キャラドゥ タキユル
●コガネジョカ スイケイテイ
ナミダ ユバ ワカチ
オユヤ グツグツトウ
オチャヌ オヨワエ
○クウトウシ カホドゥシヤ
ヨウエグウトウヌ ウフサ
ツイキヌ タチカワリ
オヨワエ バカリ
●マツイヤ エダ ムチュリ
エダヤ サカエリユリ
トウヌチ ショシラレヤ
ウルイガ サカエ
○イケヌ ウキーヌ トウヌチ
コシヤ ムリグスク
マエヌ タカヤマニ
ツルガ マユリ
●ミチヌ クブタマリ

今年まで一倉
来年の年になると
二倉、三倉
殿地の奥様は
もの思いが深い
数にも足りない私達に
酒をふるまって
この殿地の内を
打ち見に見ると
お客様と思うと
福の神様
この殿地の庭に
丸木を植えて
西東の宝
招き寄せる
西からも寄ってくる
東からも寄ってくる
西東の稲魂
寄って来い、連れて来い
この殿地の内は
こんなにかぐわしいが
黄金鍋を据えて
伽羅を焚く
黄金ぢよかを据えて
銀の湯を沸かし
お湯はぐつぐつと
お茶のお祝い
今年の果報年は
祝い事が多い
月の立ち変り
お祝いばかり
松は枝を持つ
枝は栄える
殿地の御主人は
そのような栄え
池の上の殿地
背後は森ぐすく
前の高山に
鶴が舞う
道の窪溜り

アムイ フルイバ タマル	雨が降ると溜る
トゥヌチ ショシラレヤ	殿地の御主人は
クラガ タマル	倉がたまる
○ミヨガ シラハマニ	みよが白浜に
ツルガ マキ スイルイバ	鶴が舞いをする
シズカナル ウミニ	静かなる海に
カムイガ アスイブ	亀が遊ぶ

—以下略—

恩勝集落は大和村のほぼ中央、役場のある大和浜の集落から少し内陸に入った谷間にあり、直接には海に接していない集落である。スモモやタンカン、ポンカンを作る農家もあるが、多くの家はそれですべての生活をまかなうことはできない。農協、役場などで働いたり、土木作業員をして賃金を得ている。高齢化現象もすすんでいる集落である。

八月踊りも盛んで、ここでは最初に「ミツシャゲン」が踊られる。「ミツシャゲン」は住用村川内集落の「ミシチャゲン」、大和村名音集落の「ミツシャ」と同類の名称である。その意味を集落の人々は「三足踏」と解釈している。それはミツシャゲンが足の運びが三通りしかない簡単な踊りだからである。名音集落のミツシャの解説でも述べるが、一足踏み出すことを「チュッシャ」、二足踏み出すこと「タツシャ」、三足踏み出すことを「ミツシャ」ということからの解釈である。だが、「新足踏」からの命名かとも思う。そうなるそれはその年の最初の足踏み、つまり踊りという意味である。簡単な踊りなのでアシナレ（足習い、練習のこと）にも使う曲目だからである。しかし、結論をいえば、これは「新節踏」である。

まず○側が「おしゃげからましゃげ、お許しがあれば」と打ち出すのだが、この一句目は意味不詳である。神祭りの中心アシャゲ（八月踊りの打ち出しをする神庭）のことをうたいこみ、「あしゃげから真あしゃげ」といっているのであろうか、それとも「押し上げから真押し上げ」とうたっているのであろうか、現在のところは未詳としておきたい。全体の歌のころは、「お許しただけなら、このお屋敷の庭の真中で祝ってあげましょう」というのである。シマの家々は小さく庭らしい庭のある家とて少ないが、祭の庭ではこのようにほめうたうのである。この時ばかりは小さな家も、お屋敷に変ぼうするのである。この歌は家廻りでまわってきた踊りの一団が庭に入ってきて、さあ、これから祝ってあげましょう、と宣言する言挙げの歌である。「祝ってあげましょう」というのは、「うたい踊ってあげましょう」ということで、踊り自体が祝いであり、祭りであることをよくしめしている歌である。この歌を受けて●側は「殿地」で受けて、「殿地の御主人はシマのもとなので百人を引き連れて遊ばせ方の美しいことよ」と、その家の主人をほめたたえる歌を返す。殿地とはお屋敷のことだが、この時はシマ中の家々が祭りの空間で殿地になっているのである。「シマのもとなので」とは「シマの根本になる人（家）で」という意味で、シマ建て（シマ創建）の家の主人ということである。主人をことほぐというのは家をことほぐことで、この家に祝福をもたらすことになるのである。下の句の「モモソ ヒキユスイティ アスイバシ ギョラサ（百人引き連れて遊ばせ方の美しさ）」という表現は、神歌の中でうたわれる慣用句である。それは祭式の中のノロが、多くのワキガミ（脇神）、キガミ（居神）を従えて神祭りをを行うさまを叙したものであり、「遊び」は「神遊び」のことである。ここでノロの神歌の表現がそのまま使われているのは、ハチグワツィアスイビ（八月遊び・八月踊りの祭りのことをこういう）が神遊びであると意識されているからである。この歌を○側はやはり「殿

地」で受けて、「この殿地の御主人は果報な生まれですので、米倉を前にして床をうしろにして」と返す。その家の主人が生まれながらの果報者であることを述べ、おかげで「米倉を前に床の間を背後にして座るような暮らし、つまり大分限者になりましょう」と予祝するのである。この歌を●側はやはり「殿地」で受け、「殿地の御主人は今年までは一倉だが来年からは二倉、三倉になりましょう」とさらなる繁栄を予祝する。打ち出しからここまでは「殿地ほめ」「主人ほめ」の内容で流れている。歌の継ぎ方も二、三、四首目は一貫して一句目に「トヌチ ショシラレヤ（殿地の御主人は）」をすえて歌の流れを作っているのである。これらの歌を次に○側は「殿地の奥様」で受け、「殿地の奥様はもの思いが深い、数にも足りない私達に酒までもふるまって」と返す。「殿地の主人」から「殿地の奥様」と変えて祝福するのである。「もの思いが深い」というのは、ここでは「情け深い」という意味である。「もの数にも足りないような私達に酒までもふるまってくれ」るからである。この歌は踊りの一団がその家の庭先で酒肴の接待にあずかりながら踊っているので、場に合った歌である。要求と御礼をまじえた歌ともなっている。この歌に対して●側は、「この殿地の内を」と受け、「この殿地の内を打ち見に見ると、たんなるお客様の来訪かと思うと、そうではなく福の神だ」と返す。「打ち見に見ると」の「打ち」は接頭語で、他集落では、「ナガメシャニ ミルイバ（ながめるように見ると）」とうたうところも多い。この上の句を受けて下の句では、「たんなるお客様かと思っていたら福の神の来訪だった」とことほぐるのである。この歌を受け○側は、「この殿地の庭に丸木を植えて、西東の宝招き寄せる」とうたい返す。家屋敷ほめで、そこに西東から宝を招来するというめでたい歌である。二句目の「丸木を植えて」は他集落の例とあわせて考えると、「マネキゲイ（招き木）」が伝承過程で変わってきたものであろう。「招き木」であれば福を招来する木であり意味もわかりやすい。「ニシ ヒギヤヌ タカラ マネキ ユスイロ」は八月踊りでよく耳にする文句である。「マルギ ユスイル」も「マネキ ユスイロ（招き寄せよう）」の誤伝である。たとえば、龍郷町秋名集落の平瀬マンカイでもうたわれる「ニシ ヒギヤヌ ニヤダマ マネキ ユスイロ（西東の稲魂を招き寄せよう）」と同じ表現方法である。この歌の三、四句目を直接的に継いで●側は、「西からも宝が寄ってくる、東からも宝が寄ってくる。西東の稲魂よ、寄って来い、連れ合って来い」とうたう。稲魂は稲の穀霊のことであり、ここに稲の信仰がみえる。八月踊りに稲作豊穰の感謝と予祝の意味が大きいことは、この歌からもわかろう。四句目の「セチ コ」は「スイチ コ」で「ひっばって来い」という命令的言葉である。この歌を受けて○側は、「この殿地の内はこんなにかぐわしいが、きっと黄金の鍋を据えて、伽羅の香を焚いているのであろう」とうたう。実際には黄金の鍋も伽羅の香も無縁の生活のシマの人達も、歌の文句としては知っていて、まさに祭りの庭の家ほめの歌として最高に機能しているのである。この歌を受けて●側は、「黄金ぢよかを据えて、銀の湯を沸かし、お湯はぐつぐつとお茶のお祝い」と返歌する。前歌○側の歌よりもっと幻想の目はこまかいところまで凝視するのである。「黄金ぢよか」の「ぢよか」は急須のこともいうが、ここでは湯わかし用のヤカンのことである。そしてそこにぐつぐつと沸いている銀の湯でお茶のお祝いをしようという。銀の湯といえば筆者の住んでいる大分県の湯の平温泉に「銀の湯」がある。湯にたいしても金、銀と美称辞をつけてほめることにより、すばらしさも倍増するのである。「お茶のお祝い」はあまり聞かないが、上の句にひかれて歌った下の句であろう。この歌を受けて○側は、「今年の果報年は祝い事が多い、月の立ち変わりごとにお祝いばかりだ」と返歌する。上の句で今年の世を果報年とうたい、下の句でこの果報のおかげで、月のかわるたびにお祝い事ばかりがつづくとうたうのである。この歌を受けて●側は、「松は枝を持つ、枝は栄える、殿地の御主人はそのような栄え」と返すのである。この歌の歌詞は奄美では祝いの席でよく歌われる。常磐なるめでたい松の栄えにあやかり、殿地の主人で代表される家の繁

栄を願う歌で予祝の歌である。この殿地の主人ほめの歌を受けて○側は「池の上の殿地、その背後には森ぐすくが、前には築山があって、そこに鶴が舞っている」と返すのである。池の上の殿地というのは、池に浮かぶということだが、ここでは平安時代の書院造りなどを思いうかべているのであろうか。「コシ」は直訳すれば「腰」だが、ここでは背後、つまり屋敷の裏手ということで、そこには森ぐすくがあるという。「モリグスク」は時代によってその性格もちがってくるが、ここでは「聖なる山」というほどの意味であろう。前の高山に鶴が舞うというめでたいさまは『御伽草子』の奈良絵本をほうふつさせる趣向である。この歌を受けて○側は上の句で、「道のくぼんだところには雨が降ると水がたまる」とうたい、下の句でそれを対称しながら「この殿地の御主人は倉がたまる」と同じ「たまる」という語をきかせつつ呼応させ、この家の繁栄を予祝する。この歌を受けて、●側は「みよが白浜に鶴が舞いをすると、静かな海に亀が遊ぶ」と、千秋万歳、鶴亀の遊びを出してきて家の永続的發展を願うのである。「みよが白浜」は島の地名などではなく、「御代が白浜」で、永遠につづく白浜ということ、いくつもの集落で歌われている歌詞である。また「静かなる海」は平和の象徴である。この数首の歌だけでなく、奄美の歌の世界にはヤマトの文化的発想との類似が多い。文化伝播ということを含めて今後の研究課題になるであろう。

三、名音集落の儀礼的曲目

ミツシャ	みっしゃ
○マツイヤ エダ ムチュリ	松は枝を持つ
エダヤ サカエリュリ (ハレ)	枝は栄えていく
ノラン キョラジマヤ	名音の美しいシマは
ウルイガ サカエ (ヨンノハレ)	そのような栄え
ノラン キョラジー	名音の美しいシマは
〈異性囃子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘヤレヤレ」と囃す〉	
ノラン キョラジマヤ	名音の美しいシマは
ウルイガ サカエ	そのような栄え
●ナラシマヌ ヌルイヤ	あなた方のシマのノロは
シリユシガキ コシャティ (ハレ)	白石垣を背にして
ワシマ ノランシャレヤ	わがシマのノロ様は
コガネイ コシャティ (ヨンノハレ)	黄金を背にして
ワシマ ノランシャー	わがシマのノロ様
〈異性囃子 男なら「ヘヤレヤレ」と囃し、女なら「ヒヤオセオセ」と囃す〉	
ワシマ ノランシャレヤ	わがシマのノロ様は
コガネイ コシャティ	黄金を背にして
○ナラシマヌ ヌルイヤ	あなた方のシマのノロ様は
ワラサバドゥ ハキュリ (ハレ)	藁草履を履きます
ワシマ ノランシャレヤ	わがシマのノロ様は
イチユヌ シゲエタ (ヨンノハレ)	絹の履物
ワシマ ノランシャー	わがシマのノロ様
〈異性囃子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘヤレヤレ」と囃す〉	
ワシマ ノランシャレヤ	わがシマのノロ様は

イチュヌ シゲエタ	絹の履物
●シマヌ イビガナシ	シマのイビガナシ
シマ マモティ タボルイ (ハレ)	シマを守って下さい
ナヌカ ナナユルヤ	七日七夜は
ヨワティ オセロ (ヨンノハレ)	祝ってあげましょう
ナヌカナナユ	七日七夜
〈異性囃子 男なら「ヘエヤレヤレ」と囃し、女なら「ヒヤオセオセ」と囃す〉	
ナヌカ ナナユルヤ	七日七夜は
ヨワティ オセロ (ヨンノハレ)	祝ってあげましょう

—以下略—

名音集落とその八月踊りの全体像については『奄美名音集落の八月歌』（1991、天空舎）を参考にしたい。ここではまず「ミツシャ」をみてみよう。「ミツシャ」は住用村川内の「ミシチャグン」、大和村恩勝集落の「ミツシャグン」と同じだが、「グン」がなくなっている。「グン」は「クミ」で「踏む」の意である。一足踏み出すことを名音集落では「チュツシャ（一足）」、二足踏み出すことを「タツシャ」、三足踏み出すことを「ミツシャ」というので、そこからの命名ではないかともいう。アシナレ（足習い）にも踊る踊りで、一、二、三と三回足を踏みかえるだけの簡単な踊りだからである。ただ八月踊りの最初に踊る踊りで、新しい（初め）という意の「ミ」とも考えられる。そうなると「新足踏」の略となり、最初の踊りという解釈ができる。アシャゲ（神祭りの庭）で打ち出される時にも最初にうたい踊られる曲目である。しかし、この踊りが「ミーシチ（新節のこと）」の「クミ（踏み、踊りのこと。足が主体の踊りなのでこういう）」であることは、住用村川内の「ミシチャグン」からもわかる。「ミーシチ」がめぐりやってきた喜びの（祝いの）「クミ（踏み）」という意味なのである。

最初に○側が、「松は枝を持つ、枝は栄えていく、名音の美しい村はそのような栄え」と、上の句で常磐なる松の繁栄性を打ち出し、下の句で「それにあやかっこの美しい名音のシマは永遠に栄えていく」とうたう。名音集落に関しては紙数を考えずくり返し部もていねいに記してみた。「名音の美しいシマ」は三回もくりかえしうたっているし、「そのような（松のような）栄え」は二回くりかえしている。いかにシマをほめ、その繁栄を予祝しているかがわかって。くり返し部にどの歌詞をもってくるかは無意識にも周到に考えられているのである。この歌のシマの部分を中心に引き継いで●側は、「あなた方のシマのノロは白石垣を背にして」と、上の句でよそのシマのことをいい、それに対比して下の句で、「わがシマのノロ様は黄金を背にして」と、自分たちのシマのノロをほめたたえるのである。八月踊りは個人的な祭りではなくシマ全体の感謝と予祝の祭りである。その祭り日のアラシチ（新節）は、収穫祭としての特徴もあり、シマの司祭者ノロを中心とした祭りでもある。また、シマの平和と繁栄はノロの祭祀によって保護されているのであるから、八月踊りの中でシマのノロをほめたたえるというのはごくとうぜんである。上の句と下の句の対立のさせ方はみごとである。くり返し部をみても「わがシマのノロ様は」と三回、「黄金を背にして」と二回くり返す。「黄金を背にして」とは何を背にして座るかがその立派さを物語るからである。この歌の一句目をそっくりそのままひきつぎ、○側は一句目で、「あなた方のシマのノロ様は」とうたい、二句目で「藁草履を履きます」とうたう。そして下の句では上の句と対立させて、「わがシマのノロ様は絹の履物」と自分達のシマのノロをほめるのである。「絹の履物」とは「立派な履物」の形容で、それほどすぐれた立派なノロ神

をいただいていると誇るのである。ここでも「わがシマのノロ様は」を三回、「絹の履物」を二回くり返す。この歌をうけて●側は、「シマのイビガナシ、シマを守って下さい、七日七夜は祝ってあげましょう」とうたう。「イビガナシ」は「斎部がなし」という字をあてたりするが、ここではシマの守り神というくらいにしておこう。そのイビガナシにシマの守護をお願いするのに、下の句で「七日七夜は祝ってあげましょう」とうたう。ここで「祝う」は「踊る」と同義で使われており、踊ること自体が祭りであり、祝いであることをあらわしている。ここで「七日七夜は」を三回、「祝ってあげましょう」を二回くり返しているのは、そこを強調しているからである。七日七夜踊りつづけるというのはおおげさではなく、かつてはそのように踊っていたという。

ネエウドゥリ（１）

根踊り（１）

○ノランシャレ ショシリヤレヤ
シマヌ ムトゥ ヤスイガ（ハレ）
モモソ ヒキユスイティ
アスイバシ ギョラサ
（ヨンノハレ）モモソ ヒキユ

ノロ様 主人様は
シマのもとですが
百人を引き寄せて
遊ばせ方の美しいこと
百人を引き寄

〈異性囃子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘエヤレヤレ」と囃す〉

モモソ ヒキユスイティ
アスイバシ ギョラサ

百人を引き寄せて
遊ばせ方の美しいこと

●アスイバツガ タメエニ

遊ばせるために

ヒキユスイティ ウチャガ（ハレ）

引き寄せておいたが

オメエグワ ソエマデモ

思い子の末までも

アスイディ タボルイ

遊んで下さい

（ヨンノハレ）オメエグワ ソエマー 思い子の末ま

〈異性囃子 男なら「ヘエヤレヤレ」と囃し、女なら「ヒヤオセオセ」と囃す〉

オメエグワ ソエマデモ

思い子の末までも

アスイディ タボルイ

遊んで下さい

—以下略—

名音集落ではアシャゲイ（神遊びの庭）で八月踊りが打ち出されるが、最初にミツシャなどをうたい踊ったあと、ヤスイキと称して、各家々を踊りはめぐりはじめる。最初にまわるのはオヤノロ（親ノロ、名音ノロのこと）の家である。その時アシャゲイからオヤノロの家に向かう時にうたうのが、ネエウドゥリ（１）である。ネエウドゥリは道行きの踊りで、身体を左右にふるだけの簡単なものである。住用村川内で、「ミシチャゲン」と「オボコリ」を「ネオドリ」と言っていて、それと意味的にも機能的にも通じる。「根の踊り」の意で、八月踊りのもっとも大事な「もと」になる踊りである。ネエウドゥリ（１）は、○側が「ノロ様、主人様はシマのもとになる方でございます、百名もの神々を従えての神遊びの遊ばせ方の清らかで美しいことよ」とうたいはじめる。「ショシリヤレ」は「アミシャレ」と対語ともなり「主人」と訳したが、「奥様」の意であるという人もいる。「シマのもとになる」は「シマ建てのもとからいる人」ということで、シマの基になる方との意味である。三句目の「モモソ ヒキユスイティ（百名の神女を引き寄せて）」の表現は奄美沖繩の神謡の常套句である。この最初の歌は、八月踊りの行われる新節の行事がシマ全体の祭りであることをしめし、シマの安寧が

ノロ神の祭祀で保たれていることを明解にあらわしている。「アスイバシ ギョラサ（遊ばせ方の美しさ）」は、ノロ神が杵神、ワキ神などの神を従えて行方アシャゲイでの神遊びの美しさをほめたたえたものである。それを継ぐ●側の歌は、「遊ばせるために引き寄せておいたが、思い子の末までも遊んで下さい」となる。この時の「遊ぶ」は前歌のノロの神遊びとおもむきをかえ、この八月踊りの遊び（これも神遊びではあるが、一般の人々が参加するという点においてノロの神遊びとは一線を画している）、すなわち、八月遊び（八月の祭り、ここでは特に八月踊り）のことである。「思い子の末までも遊んで下さい」というのは「子々孫々まで祝って下さい」との意で、シマの永遠なる安心を願っているのであり、予祝しているのである。

ネエウドゥリ（２）

○オシカエシ カエシ

デイ オシリヤレ シャヲロ（ハレ）

オニワ カタハシ（ヘエ）ヤ

カラチ タボルイ

（ヨンノハレ）オニワ カタハー

〈異性離子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘエヤレヤレ」と囃す〉

オニワ カタハシヤ

カラチ タボルイ

●オヤグムイサ ヤスイガ

デイ オシリヤレ シャヲロ（ハレ）

オニワ カタハシ（ヘエ）ヤ

カラチ タボルイ

（ヨンノハレ）オニワ カタハー

〈異性離子 男なら「ヘエヤレヤレ」と囃し、女なら「ヒヤオセオセ」と囃す〉

オニワ カタハシ（ヘエ）ヤ

カラチ タボルイ

根踊り（２）

押し返し返し

さあ、お祝いしましょう

お庭の片端は

貸して下さい

お庭の片端

お庭の片端は

貸して下さい

おそれいりますが

さあ、お祝いしましょう

お庭の片端は

貸して下さい

お庭の片端

お庭の片端は

貸して下さい

—以下略—

ネエウドゥリ（２）は、シバサシの時のヤスイキ（家まわり）の打ち出しの歌である。シバサシ（柴挿し）は、アラヒツィ（新節・旧暦八月の丙と丁の両日。アラセチ、アラシチ、アラシツィともいう）から七日目の壬と癸の日である。この日は前日取ってきたススキを一本ずつ各家の軒に挿すので、この名称がある。○側の打ち出しの「押し返し返し、お祝いしましょう」とうたうのは七日前のアラヒツィにまわってきたので、それを意識して、「また、お祝いの踊りをしましょう」とのあいさつである。このあいさつを上句でしてから、「祝うために（踊るために）庭の片隅を貸して下さい」と下の句をつづけるのである。それを受けた●側は、「おそれいりますが、さあ、お祝いをしましょう」と上の句でうたい、下の句は○側と全く同じように、「祝うために（踊るために）」庭の片隅を貸して下さいとつづけるのである。以下は省略した。

ネエウドゥリ (3)

○クウン トゥヌチ ウチヤ
ニワ ビリュサ ヤスイガ (ハレ)
オニワ カタハシ (ヘエ) ヤ
カラチ タボルイ
(ヨンノハレ) オニワ カタハー

〈異性囃子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘエヤレヤレ」と囃す〉

オニワ カタハシヤ
カラチ タボルイ

●アスイバソガ タメエニ

ヒキユスイティ ウチャガ (ハレ)
オメエグワ ソエマデ (ヘエ) モ
アスイディ タボルイ

(ヨンノハレ) オメエグワ ソエマー

〈異性囃子 男なら「ヘエヤレヤレ」と囃し、女なら「ヒヤオセオセ」と囃す〉

オメエグワ ソエマデ (ヘエ) モ
アスイディ タボルイ

根踊り (3)

この殿内の内は
庭が広いのですが
お庭の片端は
貸して下さい
お庭の片端

お庭の片端は
貸して下さい

遊ばせるために

引き寄せておいたが

思い子の末までも

遊んで下さい

思い子の末ま

思い子の末までも

遊んで下さい

—以下略—

八月踊りはかつては昼夜連続して踊りつづけた。このネエウドゥリ (3) はアラヒツイ (新節) の昼間のヤスイキ (家まわり) の時に打ち出される歌で、シバサシの時の打ち出しの歌の上の句「押し返し返し、さ、祝い (踊り) ましょう」の文句はない。○側は、「この殿内の内は、庭が広いのですが、お庭の片端は貸して下さい」と、踊りをはじめるあいさつを、家ほめをともなうたうのである。これを受けて●側は「遊ばせるために引きよせておいたが、思い子の末までも遊んで下さい」とネエウドゥリ (1) の二首目で紹介した歌でかえしている。どのような歌を返すかは、リーダーの保持する歌の量と質、そしてその時々にあわせた選び出し方のセンスによる。以下省略した。

ネエウドゥリ (4)

○オゾムイゾムイ アミシヤレ
ディ オシリヤレシヤヲロ (ハレ)
オニワ カタハシ (ヘエ) ヤ
カラチ タボルイ
(ヨンノハレ) オニワ カタハー

〈異性囃子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘエヤレヤレ」と囃す〉

オニワ カタハシ (ヘエ) ヤ
カラチ タボルイ

●オヤグムイサ ヤスイガ

ディ オシリヤレシヤヲロ (ハレ)
オニワ カタハシ (ヘエ) ヤ

根踊り (4)

起きて起きて奥様
さあ、お祝いしましょう
お庭の片端は
貸して下さい
お庭の片端

お庭の片端は
貸して下さい

おそれいますが

さあ、お祝いしましょう

お庭の片端は

カラチ タボルイ	貸して下さい
(ヨンノハレ) オニワ カタハー	お庭の片端
〈異性囃子 男なら「ヘエヤレヤレ」と囃し、女なら「ヒヤオセオセ」と囃す〉	
オニワ カタハシ (ヘエ) ヤ	お庭の片端は
カラチ タボルイ	貸して下さい

—以下略—

八月踊りは夜、昼とわず踊られると前述したが、このネエウドゥリ（４）は夜のヤスイキ（家まわり）の時の打ち出し歌である。それで○側は打ち出しの冒頭、「起きて起きて奥様、さあお祝い（踊り）しましょう」とうたうのである。「起きて起きて奥様」とは本当にその家の人を起すのではない。この八月の遊び日に寝ている人などいるわけがない。これは「あいさつの歌」なのである。下の句とそれにつづける●側の歌については、ネエウドゥリ（２）で述べた。

ネエウドゥリ（５）〈ネエウドゥリ（１）～（４）のあとにつけられる歌〉

- | | |
|--------------------------------------|------------|
| ○オニワ マモナカニ | お庭の真中に |
| ワガ ユワティ ウカバ (ハレ) | 私が祝っておいたら |
| コレカラヌ サキ (ヰ) ヤ | これからの先は |
| オユウエ ミシヨルイ | お祝いなされ |
| (ヨンノハレ) コレカラヌ サー | これからの先 |
| 〈異性囃子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘエヤレヤレ」と囃す〉 | |
| コレカラヌ サキ (ヰ) ヤ | これからの先は |
| オユウエ ミシヨルイ | お祝いなされ |
| ●オユウエ スル クウトウヤ | お祝いをするには |
| オヤカラヌ オキカ (ハレ) | 親からの慣習 |
| オメエグワ ソエマデ (エ) モ | 思い子の末までも |
| オユウエ ミシヨルイ | お祝いなされ |
| (ヨンノハレ) オメエグワ ソエマー | 思い子の末ま |
| 〈異性囃子 男なら「ヘエヤレヤレ」と囃し、女なら「ヒヤオセオセ」と囃す〉 | |
| オメグワ ソエマデモ | 思い子の末までも |
| オユウエ ミシヨルイ | お祝いなされ |
| ○マツイヤ エダ ムチュリ | 松は枝を持つ |
| エダヤ ハバ ムチュリ (ハレ) | 枝は葉を持つ |
| トゥヌチ アミシャレ (ヘエ) ヤ | 殿内の奥様は |
| ウルイガ サカエ | そのような栄え |
| (ヨンノハレ) トゥヌチ アミシャー | 殿内の奥様 |
| 〈異性囃子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘエヤレヤレ」と囃す〉 | |
| トゥヌチ アミシャレ (ヘエ) ヤ | 殿内の奥様は |
| ウルイガ サカエ | そのような栄え |
| ●クウン トゥヌチ ウチヤ | この殿内の内は |
| カミ カバシャ ヤスイガ (ハレ) | こうまでも香わしいが |

- クウガネイナブイ スイケイ (エ) テイ 黄金の鍋を据えて
 チャジドウ タキユル 丁香をたきます
 (ヨンノハレ) クウガネイナブイ スイー 黄金鍋を据
 〈異性囃子 男なら「ヘエヤレヤレ」と囃し、女なら「ヒヤオセオセ」と囃す〉
- クウガネイナブイ スイケイ テイ 黄金鍋を据けて
 チャジドウ タキユル 丁香をたきます
- ズインカネイヤ タムイ テイ 銭金は貯めて
 シツイヌ スクウ マユリ (ハレ) 櫃の底に舞います
 トウヌチ アミシャレ (エ) ヤ 殿内の奥様は
 コホロ マユリ 心が舞います
 (ヨンノハレ) トウヌチ アミシャー 殿内の奥様
 〈異性囃子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘエヤレヤレ」と囃す〉
- トウヌチ アミシャレ (エ) ヤ 殿内の奥様は
 コホロ マユリ 心が舞います
- クウン トウヌチ ウチヤ この殿内の内は
 カホナ マアレ ヤスイガ 果報な生まれですが
 ムミグラヤ メエナ (ア) チ 初倉は前にして
 トウクウヤ コシャ テイ 床は後ろに
 (ヨンノハレ) ムミグラヤ メエー 初倉は前
 〈異性囃子 男なら「ヘエヤレヤレ」と囃し、女なら「ヒヤオセオセ」と囃す〉
- ムミグラヤ メエナ (ア) チ 初倉は前にして
 トウクウヤ コシャ テイ 床は後ろに
- クウン トウヌチ ウチヤ この殿内の内は
 ノヅキミシャニ ミルイバ (ハレ) のぞき見に見ると
 ファリヤヤ サラクウガネイ 柱はさら黄金
 ケイタヤ ナミジャ 桁は銀
 (ヨンノハレ) ファリヤヤ サラクー 柱はさら黄
 〈異性囃子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘエヤレヤレ」と囃す〉
- ファリヤヤ サラクウガネイ 柱はさら黄金
 ケイタヤ ナミジャ 桁は銀
- ユスイミ ユツイバ (ア) リヤヤ 四隅の四柱は
 ウイーヤ アヤティンジョ (ハレ) 上は綾天井
 シタヤ イチュダタ (ア) ムイ 下は絹の畳
 シチャル キョラサ 敷いた美しさ
 (ヨンノハレ) シタヤ イチュダー 下は絹の畳
 〈異性囃子 男なら「ヘエヤレヤレ」と囃し、女なら「ヒヤオセオセ」と囃す〉
- シタヤ イチュダタ (ア) ムイ 下は絹の畳
 シチャル キョラサ 敷いた美しさ
- イチユダタムイ ウイー (キ) ニ 絹の畳の上に
 キンヌ ビョブ タテイ テイ (ハレ) 金の屏風を立てて

ウルイガ ナハ キチュ (ヲウ) テイ それの中にいて
 ショタロ ナサケイ かわした情け
 (ヨンノハレ) ウルイガ ナハ キー それの中に
 〈異性囃子 女なら「ヒヤオセオセ」と囃し、男なら「ヘヤレヤレ」と囃す〉
 ウルイガ ナハ キチュティ それの中にいて
 ショタロ ナサケイ かわした情け

—以下略—

上記のネエウドゥリ (5) の歌詞は、ネエウドゥリ (1)、(2)、(3)、(4) の歌のあとにつけられるものである。前述もしたように、すべての歌の順番が確実にきまっているということではないが、1980年代までは、およそこの順番でうたわれた。たとえばネエウドゥリ (2) の●側が「おそれいりますが、さあ踊りましょう、お庭の片端は、貸して下さい」とうたった下の句「お庭の片端は、貸して下さい」を主に受けて、○側は「お庭の真中に、私が祝っておいたら、これからの先は、お祝いなされ」と、その家の繁栄を予祝する歌をうたうのである。それに対して●側は、○側の下の句「これからの先は、お祝いなされ」を主に受けて、「お祝いをするのは、親からの慣習、思い子の末までも、お祝いなされ」と、この祭りが先祖からずっとつづく由緒ある祭りであることをいい、子々孫々までお祝いがつづくようにうたう。この子々孫々までという、めでたい永遠性の文句に、○側は「松は枝を持つ、枝は葉を持つ、殿内の奥様は、そのような栄え」と、上の句で常磐なる松の枝葉で受け、下の句でその永遠なる繁栄を、殿内の奥様の永遠なる栄えに転換するのである。また、この歌が下の句で殿内の奥様ほめになったので、次に●側は、「この殿内のうちは、こうまで香わしいが、黄金の鍋を据えて丁香をたきます」と、上の句で「殿内のうちは」と受けて、殿内ほめをするのである。この殿内ほめは下の句で「黄金の鍋を据えて」とうたうので、それを受けて○側は、「銭金は貯めて、櫃の底に舞います、殿内の奥様は心が舞います」と殿内の分限を予祝し、殿内の奥様の幸せをことほぐるのである。この歌を受けて●側は、「この殿内のうちは果報な生まれですが、糶倉は前にして、床は後ろに」とうたう。前歌の殿内ほめを上上の句で直接に受けて、下の句で「糶倉を前にして、床を後ろに」するような裕福な暮らしを予祝するのである。この歌を受けて○側は、「この殿内のうちはのぞき見に見ると、柱はさら黄金、桁は銀」とうたう。ここで○側の目は殿内の屋内にまで入りこみ、柱は黄金、桁は銀と、その立派さをほめるのである。この歌を受けて●側は、「四隅の四柱は、上は綾天井、下は絹の畳」と、さらに天井、畳の立派さをうたう。綾天井、絹畳の「綾」「絹」は接頭美称辞で「立派な」という意で使う常套句である。この下の句「絹の畳、敷いた美しさ」を直接に受けて、次に○側は、「絹の畳の上に、金の屏風を立てて、それの中にいて、かわした情け」とうたう。屏風を立てて、周囲から空間を独立させ、その中での交情」と男女の歌にもちこむのである。その「かわした情け」を直接に受け●側は、「今朝かわした情け、あなたは忘れませんか、私はいつまでも、忘れることができない」と返すのである。このあとは、ずっと男女の愛の歌が掛け合わせ、踊りはクライマックスにむかうのであるが、ここでは儀礼歌を検討するのが目的なので、あとは割愛したい。

四、まとめ

奄美大島中部の大和村の中から、恩勝と名音の二集落における八月踊りの儀礼的曲目を考察した。笠利町、住用村につづいて、このような儀礼的曲目を具体的に分析することによって、八月踊りの祭祀的機能に迫ってみようとしたものである。この地域において八月踊りの最初に踊られるミツシャグ

ン（恩勝）、ミッシャ（名音）、ネエウドゥリ（名音）の曲目の前半部に儀礼的内容が集中しているので、そのところだけを提示するにとどめ、以下は省略した。名音のネエウドゥリ（5）でも解説したが、多くの場合このあとに男女関係の歌がつづく。八月踊り歌が男女群の歌の掛け合いで進行するのを思うとき、それは自然のなりゆきであり、生産予祝のために必要なのであろう。それでは大和村の二集落の儀礼的曲目を整理してみよう。なお、オボコリも儀礼的曲目であるが今回は省略した。また、アラシャゲについてもこの稿では語らない。

〈恩勝集落〉

ミッシャグン	一首目 (○)	①祭りの言挙げ
	二首目 (●)	①主人ほめ
	三首目 (○)	①主人ほめ ②豊穰予祝 ③分限予祝
	四首目 (●)	①豊穰予祝 ②来年以降の豊穰予祝
	五首目 (○)	①奥方ほめ ②接待感謝
	六首目 (●)	①家ほめ ②福の神の招来
	七首目 (○)	①家ほめ(庭) ②宝物の招来
	八首目 (●)	①稲魂の招来(西東から)
	九首目 (○)	①家ほめ(黄金鍋、伽羅の香)
	十首目 (●)	①家ほめ(黄金ぢょか、銀の湯、お茶のお祝い)
	十一首目 (○)	①今年の感謝(今年の果報年、お祝いばかり)
	十二首目 (●)	①家ほめ(松の栄え) ②主人ほめ(主人の栄え)
	十三首目 (○)	①家ほめ(池の上の殿内、背後のぐすく、前の高山鶴の舞い)
	十四首目 (●)	①主人ほめ ②家ほめ(倉がたまる)
	十五首目 (○)	①永遠性の希求(みよが白浜、鶴の舞い、静かな海、亀の遊び)

〈名音集落〉

ミッシャ	一首目 (○)	①シマ(集落)ほめ(松の栄え、名音の美しいシマの常磐なる栄え)
	二首目 (●)	①ノロほめ(他のシマのノロと比較しつつ、黄金を背にした立派なノロ様)
	三首目 (○)	①ノロほめ(他のシマのノロと比較しつつ、絹の履物を履く立派なノロ様)
	四首目 (●)	①シマの守護祈願(シマのイバガナシに) ②祭りへの言挙げ(七日七夜の祝い)
ネエウドゥリ(1)	一首目 (○)	①ノロほめ(祭祀の立派さ。百人の神女を従えての神遊び)
	二首目 (●)	①八月遊びの立派さ ②永遠の祭祀(子々孫々までの遊び)
ネエウドゥリ(2)	一首目 (○)	①祭りへの意欲(お祝いしましょう) ②各家の祝福(庭での八月遊び)
	二首目 (●)	①祭りへの意欲(お祝いしましょう) ②各家の祝福(庭で

の八月遊び)

- | | | |
|------------|---------|---------------------------------------|
| ネエウドゥリ (3) | 一首目 (○) | ①家ほめ (庭の片端を貸して下さい) ②八月遊びへの意欲 |
| | 二首目 (●) | ①永遠の祭祀 (子々孫々までの遊び) |
| ネエウドゥリ (4) | 一首目 (○) | ①祭りへの意欲 (お祝いしましょう) ②各家の祝福 (庭での八月遊び) |
| | 二首目 (●) | ①祭りへの意欲 (お祝いしましょう) ②各家の祝福 (庭での八月遊び) |
| ネエウドゥリ (5) | 一首目 (○) | ①各家の祝福 (庭での遊び) ②永遠の祭祀 (先の世の予祝) |
| | 二首目 (●) | ①祭りの起源 (由緒ある先祖からの慣習) ②永遠の祭祀 (子々孫々までも) |
| | 三首目 (○) | ①永遠の祭り (常磐なる松の祝い) ②各家の祝福 (奥方の永遠なる栄え) |
| | 四首目 (●) | ①家ほめ (香り高い家、調度品の立派さ、黄金の鍋、丁香) |
| | 五首目 (○) | ①家ほめ (分限、銭金が櫃の底に舞う) ②奥方ほめ (奥方の心が舞う) |
| | 六首目 (●) | ①家ほめ (果報な生まれ) ②家ほめ (分限、初倉を前に、床の間を後ろに) |
| | 七首目 (○) | ①家ほめ (黄金の柱、銀の桁) |
| | 八首目 (●) | ①家ほめ (立派な柱、綾天井、絹畳) |
| | 九首目 (○) | ①家ほめ (絹畳、金の屏風) ②男女の愛の歌への傾き (かわした情け) |

恩勝集落のミッサグンは前述したように三調子で三つの足の動くしかないことから「三足踏み」と説明されることがある。「三足」が「ミッサ」で、「踏み」は「クミ」であるが、「ミッサ」との関係上濁って「グミ」となり、「ミ」が「ン」に転訛したという説である。ただ住用村川内集落の「ミシチャグン」の説明(「住用村八月歌儀礼的曲目の考察」大分大学国語国文学会『国語の研究』第30号所収、2004年11月)でも述べたが、結論を言えば「ミーシチ(新節)」の「踏み」であろう。「新」を「ミー」というのは奄美、沖縄にわたる一般的な用法である。名音集落の「ミッサ」も同じだと思われる。最初の踊られる曲目で、祭りへの言挙げからはじまり、家まわりの踊りの最初の曲目にふさわしい家ほめ、主人ほめがつづいている。豊穡の感謝と予祝であり、家の繁栄予祝と安寧祈願の踊りである。

名音集落ではミッサとネエウドゥリをとりあげた。ミッサの語義は恩勝集落の「ミッサグン」、住用村川内集落の「ミシチャグン」と同じである。八月踊りがアシャゲイ(ノロ祭祀の神遊びの庭)で最初に打ち出される際の曲目で、シマほめ、シマのノロ神ほめ、シマの守護祈願、祭りへの言挙げ等々がうたわれている。まさに八月踊りがシマ単位での祭祀であることがわかる曲目である。ネエウドゥリ(1)は、アシャゲイで打ち出された八月踊りが、最初のヤースイキ(祝福のための家まわり)の場であるノロ屋敷へむかう道行きと、家から家へむかう時の道行き、そして門入りの歌で、シマのノロ神ほめとその祭祀の立派さをほめている。ネエウドゥリ(2)は、アラヒツィ(新節)で踊った八月踊りをまた七日後のシバサシ(柴さし)で踊る時のヤースイキの打ち出しの歌である。最初の文

句「押し返し返し」は「新節でもお祝いしましたが、また再度祝ってあげましょう」という意である。ネエウドゥリ（3）は、アラヒツイの時のヤースイキの打ち出しであるのでシバサシのように「押し返し返し」とはうたわない。ネエウドゥリ（4）は夜のヤースイキの時の打ち出しの歌である。それで「起きて起きて奥様」とうたいながら門入りするのである。ただ「起きて起きて奥様」というのは二番目の「オヤグムイサヤスイガ（おそれいりますが）」と同じくあいさつの文句である。八月遊びの夜に寝て踊りを待っている家はシマにはない。ネエウドゥリ（5）は、ネエウドゥリ（1）から（4）のあとにつづけられる共通の歌詞である。ノロほめ、八月遊びほめ、家ほめ等々、シマと家の繁栄と安寧、感謝と予祝にあふれている。踊ることが祝いであり、祭りであり、感謝、祈願であることがよくわかる内容である。また先祖から連綿として続いている祭りとしての起源と由緒をうたいあげ、子々孫々への永遠の祝いになるようにうたいこんでいる。まさにネエウドゥリは「根踊り」であり、八月踊りの意義の本質的なところをみせてくれる曲目である。

名音集落の「オボコリ」と「アラシャゲ」は紙面の都合もあり、今回は考察していないが、次の機会を得たいと思っている。